

2017年12月から19年2月まで、第59次南極地域観測隊として「昭和基地」に滞在した九州総合通信局職員の三浦澄雄さん(41)は熊本市北区。南極での仕事や生活について聞いた。

(志賀茉莉耶)

—観測隊に参加したきっかけは。

「1年に1回、文科省から通信分野の隊員募集がある。熊本高専で取得した無線技術の資格を生かせると思志願した。58次観測隊の募集にも応募したが落ちて、2度目の挑戦だった」

—南極での業務は。

「昭和基地では、隊員と無線機で連絡を取ったり、

将来の地球環境見つめる

第59次南極観測隊に参加

九州総合通信局職員 三浦澄雄さん

南極から持ち帰った氷を持つ三浦澄雄さん



◇みうら・すみお 熊本市出身。熊本高専卒。1998年総務省に入省。今年4月から同省九州総合通信局情報通信連携推進課で、テレワーク推奨業務を担当。

「極地で起こる環境変化は地球全体の気候に大きな影響をもたらすと考えられ、南極での観測は将来の地球環境の予測につながる。そんな重要な任務を負いながら、オーロラなど極地で見ることができない自然現象を目の当たりにできるのも魅力のひとつ。この仕事に興味を持ち、南極観測隊を目指す若者が増えればうれしい」

南極観測船「しらせ」と通信するための大型アンテナの整備をしたりした。基地内ではインターネットが使えらるが、観測活動で一步外に出ると、無線機が唯一の連絡手段となる」

「一度、無線機が故障するトラブルがあった。アンテナや電源、送信機を半日

かけて調べ、部品を交換して復旧できた。極地でのトラブルは隊員の命にかかわる。たまたま隊員が基地から離れていなかったため良かったが、もし観測活動に出掛けていたらと考えるとぞっとした」

—南極の生活で大変だったことは。

「6〜7月は太陽が地平線付近から上に昇らない極夜、12〜1月は太陽が沈まない白夜になる。昼と夜の区別がないため、眠れなくなってしまう隊員もいる。私も過酷な環境に適応するのが大変だった。1日1回、太陽の代わりに人工のライトを浴びて体調を崩さない

ようじていた」

—南極の氷を持ち帰ったとか。

「氷は南極から持ち帰れる唯一のお土産。雪が2万年もの時間をかけて圧縮され、当時の空気がそのまま閉じ込められている。隊員はこの氷を使ってウィスキーを飲むのを楽しみにしていた」

—南極での経験から若者や子どもたちに伝えたいことは。